福生市史の編さんを終って

原始・古代を担当して

和田　哲

『福生町誌』が刊行されて約三十年、この間、周辺自治体での市町村史がほぼ出揃った中で、新たな福生市史の編纂事業が行われた。私は以前から福生市域の遺跡調査に携わっていた関係で、編さん専門委員として原始・古代を担当させていただいた。〝どこの市史を見ても皆同じ〟というとかくの批判のある中で、市史の性格や意義を十分認識し、福生市史の特色をいかに出すかは重要な課題であった。

市史編さん事業では、通史のみを出す場合と、資料集をまとめ、その上で通史を刊行する場合とがある。また、近年は本市の『みずくらいど』のような研究誌を併行させるところも多くなってきた。福生市史では資料集を逐次まとめるという方式を採用したので、原始・古代では詳細な学術的成果は専門的研究者が利用できる資料集に、通史は一般市民にわかり易くという基本的な方針で臨むこととした。

原始・古代関係の資料集では、本市に直接関わるような古代の文献史料はないので『考古』編とした。現在、福生市域には一八個所の遺跡が知られているが、市内最大の縄文遺跡である長沢遺跡を除いては殆んど調査が実施されていない。そのため、市史編さんを機に各遺跡の試掘調査を実施したいと考えたが、諸々の制約から、実際にはNo.6遺跡（縄文後期）とNo.13遺跡（縄文前期）の二遺跡の試掘を実施したに過ぎなかった。それでも、市域の歴史の空白部分を埋め、通史の記述に役立つ成果を得ることができた。

『考古』編には木村東一郎氏やC・T・キーリ氏による過去の文献を再録するとともに、各遺跡ごとの研究結果を集約し、市内採集の遺物なども提示した。また、資料編と

いうこともあり、原始・古代に限定せず考古関係全般を対象とした。従って、市内の中世遺構と推定される長者堀伝承について取り上げ、若干の資料を採録した。今後、中世考古学は益々発展が期待され、伝承や限られた文献に頼るだけでなく、考古学的手法による解明が待たれるテーマでもある。さらに、付篇として市内所在の全ての板碑も集録し、資料として活用されることを期した。

原始・古代の通史の執筆・編集は筆者一人で行なった。これは、資料的制約もあって、弥生時代以降は直接本市域に関係する資料がないという現状もあり、当初、割り当てられた全体のページ数が一〇〇ページ程度と少なく、余り細分化するのは困難であるという事情もあった。一人で執筆することは、内容・文体などあらゆる面で統一がとれるという利点はあるが、異った視点からの検討に欠ける怨みはあるであろう。

通史では本市に直接関連する資料のない弥生時代以降の扱いには苦心した。古代については大方の市史が、記紀や万葉の限られた資料を引用し、ほぼ類似したパターンで書かれるか、当該市町村の遺跡紹介という方法を多く採っている。市史を古代史全体の流れの中でどう位置づけるかは重要であり、こうした手法が用いられるのは当然である。

近年、考古学上の新発見は枚挙に暇がない。こうした状況下で、それら新発見の意義を分り易く説くことも、考古学研究者に課された責務である。私は、古代の項では最近の考古学的発掘の成果を極力とり入れ、遺跡や遺物から福生市周辺の古代に迫る努力をした。しかし、何分紙数の制約上十分意を尽せなかった点は否めない。今後、市史を超えて武蔵国全般に亘る程度のこうした取り組みがあってもよいのではないかと考えている。氾濫する考古資料の整理と精選を通じ、十分な意義づけが必要であろう。

最後に、市史は通史の完結によって終了するものではなく、限られた時間内でまとめ上げた現時点での成果に過ぎない。福生市史の原始・古代の分野に於いては、まだ空白の部分も多くあり、今後の更なる研究が必要である。また、歴史考古学が成果を上げつつある現状を考えるならば、より広く各時代に亘る考古学的方法による市史の解明が要求される。この事業を更に継承し得るような対応を切望するものである。

（わだ・さとし　市史原始・古代担当　専門委員）

中世を担当して

—新たな出発を認識—

久保田昌希

福生が歩んできた歴史のなかで、「中世の福生をどのように描いたらよいか」ということが、市史編さん事業のメ

ンバーに加えていただいてから、ずっと頭の中にありました。そしてこの思いは、いま『福生市史　上巻』を手にしても残っている、というのが正直な感想です。

編さん事業のなかで私にまわってきた仕事は、中世部会を率いて第一冊目の市史資料集の編集をすることで、これは昭和六十二年三月に『中世・寺社編』として刊行されました。その「あとがき」に編集の様子について書きましたので、お読みいただければと思いますが、それはともかく、資料集ではとくに①滝山・八王子城主であった北条氏照の発給文書を出来るかぎり集めたこと。②五日市町の古刹大悲願寺の過去帳を御住職の御承諾により掲載できたこと。の二点が特徴として言えると思います。今日、福生に関する中世史料はきわめて限られております。したがいましては①も②も福生の歴史と直接に関わりをもつということではありませんが、中世福生の歴史をひろく多摩周辺からみつめていく時の手掛りにはなると考えています。なお最近①は当該研究分野にも参考にされております。②は他の自治体史に先行した試みとして意義あることと思われます。

また寺社史料のうち近世のものですが、市内熊川の千手院に伝わる大般若経六百巻の奥書をすべて掲載しており、これによって近世の信仰圏の一端を知ることができると思います。

編さんの過程ではさまざまな調査も欠かすことができません。市域周辺はもちろんのこと、それ以外では九州佐賀県伊万里へ熊川治郎左衛門を追ったこと、市内熊川の真福寺で発見された氏照文書の写しについて和歌山県高野山の高室院へ出掛け、そこでこれまでほとんど知られていなかった、大量の近世「登山者名簿」を拝見・記録し、高野山信仰と多摩・関東地方の問題を考えるきっかけを作ったことも意義あることと考えます。さらに、中世福生の領主でもあった「駿河伊達系図」にみえる塚目家政なる人物の実像をさぐりに、福島県伊達郡国見町に出かけたこともありました。そして市内における短期間での墓石調査実施のこともつけ加えておきたいと思います。

一方、資料集の刊行を機に、それまでも検討されていた中世通史編の内容が、中世部会で以後何回も議論され、目次・執筆内容や執筆分担が検討されていきました。執筆者による提出原稿は、内容の調整がくり返され、また原稿の書直しも行われました。図版選定の苦心も合わせて、校正段階の最後の最後まで粘ったというのが実情です。こうして中世通史編は出来上ったのです。

中世通史編は『福生市史　上巻』の全体一一一二頁中、二〇〇頁を占めています。ここでその特徴を箇条書にしてみましょう。

一　中世の入口の扉を開いていただくために、多摩の東と西—中世福生の位置—のコーナーを設けたこと。

二　鎌倉時代では、福生の領主であった平山氏や塚目家政の検討をしたこと。
三　南北朝・室町時代では、あらためて石浜合戦について検討し、また武州南一揆や武蔵守護代大石氏の展開について新知見を紹介したこと。
四　戦国時代では、北条氏照の支配について限られた頁数のなかで全面展開したこと。また、かつての『福生町誌』でまとめられた「中世の福生の生活」を継承する意味で「北条氏照と福生の人々」を設けたこと。市内寺院の過去帳から八王子城の攻防戦を綴ったこと。
五　宗教史関係では、市域の宗教状況を前提に、とくに臨済宗の展開を特徴づけ、また板碑をめぐっても問題提起をしたこと。

などであるといえます。いずれも限られた頁数にて、なお記述不足の箇所もあると思いますが、ぜひお読み下さい。

ところで待望の市史は完成しましたが、これで福生の歴史編さんに終止符がうたれるべきではないと思います。むしろ市史の完成は同時に新たな出発点であるという認識にたって、形はともかく編さん過程で収集した資料の保存・利用の便宜と市史研究の深化をめざす体制を、今後築いていくことこそ、真に福生市の「来し方、行く末」を判断する材料を提供していくことになると思っています。

（くぼた・まさき　市史中世担当　専門委員）

やり残しの仕事が大きい

北原　進

福生市史編さん委員会条例、およびそれに基づいて七名からなる市史編集専門委員の設置規則が施行されたのは、昭和五十八年十月一日であった。最初の編さん委員会が開催されたのが十月二十九日、第一回専門委員会は十一月十五日であったから、通史編の下巻完成で十一年を経過することになる。

当初の編さん完了が、市制施行二十周年の昭和六十五年（平成二年）七月を目途に考えていたので、四年近く遅れてしまったことになり、記念式典に分厚い市史の豪華本をお土産に、という大方の御期待には沿えなかった（だが同時に編さんは市制二十周年記念事業という性格をもった）。当時はまだ資料調査が不十分であったり、資料編の刊行など通史執筆の前提が整っていなかったのが遅延の理由であったが、そのつど編さん委員会や市当局の御了解を頂きながらも、「どんなものでも兎も角出してしまう」拙速主義はとらないというのが、専門委員会の一致した見解であった。もちろん、長引けば良い市史ができる、という訳ではない。いたずらに資料だけを出して、ただ年を重ねるのは無責任である。一応、十年という年月は長いかも知れない

が、資料集その他の成果も含めて考えて頂ければ、他市に比してもあながち長期に過ぎたとは言えないであろう。だが弁解は慎んで御批判をまちたい。

市史編さんの発足に当って、私ども専門委員はどんな市史を作ろうと考えただろうか。条例には「福生市の歴史を系統的に叙述し、市民の郷土に対する理解と愛郷心を深め、市の発展に資する」、専門委員会設置規則には「市史編さんのための資料の収集、調査研究及び編集に関する実務」と、目的を記しているのみである。条例や規則だから余り具体的でないのは当然であるが、同時に示された編さん大綱にも「福生市の歴史を過去から現在までの時間的経過に伴って、その事実を編さんするという方法」で、原始古代、中世、近世、近代、現代、民俗、自然科学という区分が望ましいとされた。

結局、具体的な資料編・通史編のあり方などは、専門委員会に任せて頂いた訳である（もっとも、福生市史の通史は一冊で十分という考えも一部にはあったようである）。そこで市の編さん大綱とは別に、専門委員会のもう少し具体的な大綱を作ることを第一回の委員会で決め、翌春の編さん委員会で了承を得た。そこでうたった基本方針は、(1)市民の立場に視座を置いた活用される市史、(2)世界史・日本史の全体の流れのなかで総合し特殊性を示す、(3)資史料の保存・整理をして今後とも活用できるようにする、(4)市民の協力・批判を得ながら作り、次代市民の郷土理解と自治意識の涵養にも役立てる、というものであった。

問題は、その全体構成である。「市史は、通史編・資料編・概説編・調査報告などとする」。通史編（いわゆる本編）は上・下二冊とする。資料編も現代編まで合計十冊、自然を除いてすべての分野で編集・刊行ができた。これまでに収集した資料の数量からすると、まだ後続の資料編を編集できる程であるが、今回の市史編集のための基本資料は一応収載できた。研究誌「みずくらいど」は、その他にあげられたうちの、研究・情報交換雑誌である。調査報告書や講座・講演・研究会の記録、編さん便り等も刊行することができるようにしておいたが、「みずくらいど」に収めることで、ほぼ間に合わせることができた。

残されたのは概説編である。これはダイジェスト版とか市民版と呼ばれるもので、「通史編・資料編の成果に立って、市民が手軽に親しめる〝福生の歴史〟（仮題）を作る」と明記してある。このことは上巻が完成する頃にも、また編さん委員会の席上でも、通史編・資料編とセットで考えておき、通史に続いて編さん・執筆が図られねばならないと説明し、個人的にも委員の先生方にお話ししておいたものである。

この市民版通史については、現在まったく検討の着手にも上っていない。

市民が市民と共に作るものであるが故に、また正しい郷土史の知識と郷土愛を育てるべきものであるが故に、市史編さん事業が終ったあとも、市には常に市民が市史の勉強を継続して行なえる場が用意されていなければならない。そして、その場への招待状である市民版ないしダイジェスト版がないというのでは、勉強のきっかけが保証されないことになる。こうした発想がないとすれば、本当に残念なことである。

早々に、市民版の作成をどうするかを考えるべきである。万が一、作成しない・できないという場合にも、なぜそうなのかをはっきりさせておくべきであろう。

さらにもう一つ。最近は自治体史の完成時に、資・史料の保存・利用機関が作られるのが普通である。生涯教育、成人教育がこれ程さかんになっているとき、カルチャースクールや社会教育の教養講座だけにそれを任せるには限界がある。文書公開問題や公文書館法の実施ともかかわり、市民の自主的研鑽の場として整備される必要がある。それは、編さん過程で調査・収集された資・史料を、引き継ぐだけの場ではないのである。

毎日々々量産され、置き場所にどこでも困っている文書類から、何をどう保存・利用できるようにするか、文書を廃棄するには、どういう手続きが必要か、現用文書と要保存の古文書を、どう保存・整理・利用できるようにするか、それを市民版通史の作成や、市民との研究の場などとともに、一連の市史編さん事業として考慮すべきであった。

市史の編さんは、単なるお祭りではない。お飾りを作ったわけでもない。市史を編さんすることは、これからの市民の歴史を編むことでもあったはずである。

（きたはら・すすむ　市史近世担当　代表専門委員）

生涯学習と市史の編さん

河上一雄

グループ・ゆずりは

福生市史ことに民俗編の編さんにあたり、多くの市民のかたがたのご協力をいただいたが、なかでも「ゆずりは」のかたがたの協力なくしては民俗編の編さんを語ることはできない。

「ゆずりは」というのは、主に福生市に在住する女性からなる生活文化を研究するグループのことである。

このグループは、福生市教育委員会の主催する市民講座の受講生から結成されたもので、たまたま筆者が講師をつとめたことに由縁する。

生活者の目をもって、地域の生活文化を見つめ考えていこうとの講座であった。この講座を通じるなかで、単に生

活文化を知るだけでなく、自分の手によってとらえてゆきたいとの姿勢が生まれていった。
このため、どのような方法をもって生活文化をとらえるかの学習が始まることとなり、民俗学の手法について学ぶことがおこなわれたのである。
受講生は、生活歴や学習歴において大きな差異が見られるにしろ、学ぶことの姿勢においては一致しており、その熱心さには驚かされるものがあった。
調査研究の一応の手ほどきが終わるころに、市史編さんの事業が始まり、このメンバーにお手伝いいただくことになったわけである。
市内各地での聞き取り調査が継続されるなか、じつに細やかな調査報告がなされるとともに、生活者の目というものが調査に大いに活かされたのも特筆されよう。
こうしたなかで、民俗の資料編が編まれていったのである。
このメンバーのあり方を見る時、今後の生涯学習のあり方に大きなヒントをあたえてくれるものといえよう。
まさに「生きることは学ぶことである」とのよい手本といえる。
今や、このメンバーはそれぞれ自分の研究テーマにもとづいて研究を進めるとともに、委嘱されての調査活動を行うにいたっている。

生活文化と生涯学習

生活文化に興味・関心を抱き、それがライフ・ワークとなっていった例を先にあげたが、生涯学習のテーマとして生活文化を取り上げることを奨めたい。
現在、福生市においては都市化の波が押し寄せ、福生市の生まれとか多摩地方の生まれではない人達が、住民のかなりの部分を占めるようになってきている。
こうしたなかで、どのような地域社会を作ってゆくかが大きな課題であろう。
単に、寝る場所としての地域社会ではなく、人々が地域に根ざし故郷と思える社会でなくてはいけないと考える。
このためには、地域社会としてどのような文化、それも生活文化を形成していくかが大切であろう。そのためには、伝統的な生活文化を十分に踏まえ、地域の特性をどう理解し発展させていくかが必要である。
そして、この課題が生涯学習のテーマとして市民に広く受け入れられる時、地域社会の発展が期待されるのではなかろうか。
市史の編さん事業は終わろうとしているが、この事業の成果をどう活かすかが今後の大きな課題であるが、先に述べたように生涯学習に資することがこの課題に応えるものといえる。

生涯学習の観点から、社会教育の施策のなかで市史を活用する機会を増やしてもらいたいものである。
それがひいては、明日の福生市の発展につながるといえるのではなかろうか。
最後に、民俗の資料編ならびに通史の編さんにあたり、市民の多くの方にご協力いただいたことを、あらためて感謝したい。

（かわかみ・かずお　市史民俗担当　専門委員）

『市史』の終りこそ始まり

新井勝紘

『福生市史』の編纂事業がどのような成果を残したのかという視点で総括してみる時に、『市史』（上下二巻）という分厚い本を何年かけて作ったということだけがバロメーターではないと私は考えています。その検証はまず、第一に福生市の歴史を編纂していくさまざまな過程の中で、市民の中に自分の住んでいる地域の歴史や文化についての理解をどれだけ深めてもらうことができたかが、問われなければならないと思います。この事がなおざりにされて、でき上がった『市史』だけを机にのせて、その評価をするのは間違っています。
ここで市民といいましたが、それだけではありません。『市史』を編纂する企画を行政の仕事として立案し、それなりの予算を使って業務として遂行してきた市役所内部にいる行政マンが、どれだけこの市の歩んできた歴史を理解し、その歴史と、今現在自分が日夜進めている市役所の仕事とをつなげて考える事ができるようになったのかということも、検証の大事な尺度の一つだと思います。
それは単に一般の行政にたずさわっている人にとどまりません。市のトップにいる役職者にも同様な事が言えます。少なくとも、自分の市の刻んできた歴史も理解しないで、どうして住民本意の行政ができるだろうかという思いが強いからであります。
また、市民から選出された市議会議員にも同じことがいえるのではないでしょうか。住民の生活の視点からの声をすくい上げて、その民意の代弁者として、行政にものをいう事が議員の任務とすれば、その地域の住民の生活に目に見えない形で反映している、歴史や伝統や文化のあり様に無理解でいいはずがないと思うからであります。
その意味で『市史』の編纂事業は、はたしてどうだったでしょうか。資料調査はもちろんのこと、『資料編』をはじめ、『みずくらいど』の編集発行、さらに市史の講座や見学会など、さまざまな活動を実施しましたが、こうしたことを通して、地域の歴史への関心と理解が少しでも深まったのだろうか。とりわけ、十七号まで続いた『みずくら

いど』には、「市民が綴る福生の歴史」の頁を毎号設け、市民の歴史意識に強く働きかけてきました。いまそれをならべてみると、ごく一部の市民にとどまりましたが、それでも福生市民の歴史への関心の在り方が率直にあらわれています。これだけで判断することはできませんが、すこしでも歴史に接近したいという思いが伝わってきますし、また自分たちが歴史の主体であるということが、紙背を通して伝わってきます。このことが大変大事なことなのではないかと思っています。

それともう一つ、『市史』の総括という点では、少し矛盾した話にはなりますが、まだ、『市史』ができたという事だけで成果ははかれないということです。極端に言えばようやくスタートラインについたともいえるでしょう。よく『市史』が完成すると打ち上げ会をやりますが、私はむしろ起工式にしなければいけないと思っています。市民にとっては手軽にというわけにはいきませんが、手に取って読む事ができる史書ができたわけですが、それは私たちの住む地域の歴史を知ることができる教科書ができたようなもので、そのテキストを使ってどう学習し、血肉化していくのかは、これからなのです。またそれをどのように行政に、議会活動に、教育の現場に、環境保護に、史跡や文化財保護に、あるいは地域文化創造に、市民の日常の生活文化の進歩に活かしていくのかは、まさにこれからの問題なのです。その素材が『市史』という形で目の前に提供されたのです。その意味で市史編纂の事業はむしろ事後こそしっかりしなければいけないのです。そういうアフターケアーまで含めて総括することをしないと、隣接の市町村と肩を並べることがやっとできたという、単に形だけが整ったというだけに終わってしまいます。それに歴史は刻々と進行していることを忘れてはいけません。歴史が近い近代とか現代が資料が最も揃っているとはとても言えない状況をみますと、これからの歴史の編纂を世紀単位に考えての長期的な資料収集（公文書、私文書を含む）や研究およびその保存体制・施設を展望しておかなければなりません。市史を編纂するということは単に歴史叙述することだけにとどまるものではないと考えている立場からすると、本棚に記念品のごとく収まってしまう市史ではだめなのです。市民をはじめ多くの方が、『市史』を手垢がつくほど駆使して、そこからなにか汲み出し、さらに次なるステップに向かうためのエネルギーを蓄えるための肥しとしなければ、意味がないと思います。

果たして『福生市史』で培った有形無形の財産は、これからどういう方向に収束していくのか、あるいはどんな形で継続発展していくのかを見守っていきたいと思います。そのことが、『市史』の編纂に市民の一人として携わった者の最後の任務ではないかとも思っています。おそらく、

二十一世紀に再び盛り上がってくるであろう将来の福生の歴史編纂のためにも、私たちの任務は大変重いものがあります。

ご期待にお応えできたかどうか

川鍋幸三郎
（あらい・かつひろ　市史近代担当　専門委員）

本市では昭和三十五年十月に、多摩地域での市町村史のさきがけともいうべく『福生町誌』が刊行されている。以来四半世紀が過ぎ、今回『福生市史上・下巻』が発刊される運びとなっている。ここに至るまでには市史編集専門委員会がスタートし十一年が経過している。

私は昭和四十三年四月から福生第一中学校に在職し、郷土研究部を担当、第一次長沢遺跡発掘調査等に生徒ともども参加していた。

そのようなきっかけから昭和五十三年福生市に文化財専門委員会制度が発足したとき、私もその一人として委員に委嘱された。

昭和五十八年十一月に福生市史編集専門委員に委嘱された裏には、そのような経緯があったのではないかと想像したりして当初は内心喜んだ。

しかし、十一月十五日に現在の商工会館二階二〇三号室で当時の田村匡雄市長さんから委嘱状をいただき、他の委員さんの顔ぶれを眺めたとき、当惑に変わった。

というのは、他の委員さんはそれぞれその方面ですばらしい研究歴を持っておられるのに対し、私は地域史にとり組むのはこれがほとんどはじめてだからである。

同時に執筆者の陣容のことがあったからでもある。

すなわち、他の先生方は身近かに執筆陣がおられるようなのに反し、私の方はこれから探さねばならない。適任者が見つかるかどうかという不安である。

ところで、現代部門を担当するに先だち、『福生町誌』を何度となく読んでみた。そして感心させられたことは、町誌の執筆者が当時の町の実態を後世に残すべく、手づくりの資料を作成し掲載していることである。

現代という部門は、ある意味では非常に書きにくい分野である。それは、市内に多くの生き証人ともいうべく皆さんが活躍しておられることと同時に、なにをどう選択し、取りあげ、どう構成していくかということが全て執筆者に委ねられているからである。他の時代のように、資（史）料面での制約があるわけではない。あるにはあるが、自分でつくっていけるという部分もあるわけであり、それだけ自己の構想をどう描くかということが重要となる。

この点、福生町誌は手本になるものであるが、それは執筆者が全て市内の小、中学校に在職していた先生方であっ

たということ、しかもさらに好都合なことは当時の町内（当時福生は町であった）の事情によく通じている方々で、構成されていたという好条件を備えていたから出来たのである。

この点に刺激を受けて、私もできることならそのような市史づくりをしたいと考えた。

市史編さんという事実は、過去の資・史料を調べ収集し分析し記述するということと同時に、現在の市の姿をできる限り克明に後世に残すという側面も重要なのである。

統計資料一つをとりあげても、行政で作成している全市的なマクロのものだけではなく、市内を町会別に見るというようなミクロの資料を作成し残すということも大切なことである。

そして、この試みは多少実現できたのであるが、もっと多くを実現しようとの願いは調査・執筆者の面で制約を受けることになってしまった。

というのは、このようなきめ細かな記述をするためには前提条件として、執筆者が地域をよく理解していないとできないのである。このことは自明のことであるが、そのためには、福生市に在住・在勤の方にもっと入っていただきたかったのである。

たしかに現代部門の中をいくつかに分け、そのいくつかの中ではこのことは実現できたのであるが、全ての方面でとはいかなかった。それが最後まで尾を引いてしまった。そのため市民の皆さんのご期待にお応えできているかどうかいささか不安なわけである。

このような次第でいささか気が引けるのであるが、一つ次なる市史づくりにむけて記しておきたいことがある。

情報化の今日、福生市に関する膨大な日々の資料を、今後どう意図的・継続的に収集し保存していくかということである。

これについては、市独自でやるもよし、広域行政の見地から、部門（分野）を決めて分担していくのもよし。とにかくそのようなポストを設置しとり組んでいってほしいというお願いである。これは民間に委ねるものではなく、公的機関がきちんと取り組んでほしいと考えるのである。

最後に、十一年間という長きにわたり予算面や編集執筆の面で私どもの意向を最大限尊重して下さいました市当局や編さん室事務局の皆様方に心からお礼を申しあげる次第です。ありがとうございました。

（かわなべ・こうさぶろう　市史現代担当　専門委員）

回顧裏談

宮岡一雄

編集専門委員を拝命してから、早や回顧の筆を執る時を

迎え、光陰の速さと遂げ得たことのささやかさに一種の戸惑いを感じている。確固とした史観を持ち合せていない小生、たゞひたすら、科学的に自然を見据えてきた者にとり、五里霧中に身を置いたまま、市史の自然環境分野を担当することになった。一種の冒険である。「市史」と「自然」との関連性に何かしら納得のいかない違和感をおぼえ、その上、狭い領域にある福生の自然を自然史的に取扱うことの困難さを理解していた故に、行き先が偲ばれて心細い限りであった。この心理的状況をどう処理し、違和感の少くない形で市史の俎上に乗せるか、その接点をどこに求めるか。一抹の不安を抱えながらの出発であった。一つの挑戦であり、私にとって未知への遭遇であった。

自然科学的思考と歴史科学的思考との間には、必然的に距離が介在する。その間にある調和の可能性を模索することから始めなければならなかった。市史に自然分野を加えるべき必要性は何か、必要だとすれば、どのような形であるべきなのか、思考錯綜、堂々廻りの連続であった。僅かに残されている福生の自然、それは市民生活の中で単なる点景に映り、生活周辺に点在する風景的な存在であるに過ぎない。それは、「自然」という語が宿すイメージとはほど遠い自然である。この中に秘んでいる「自然」をどう掘りおこして市民に伝えられるかが一つの焦点であった。

自然環境分野として、市史編さんにどう係わるか、どう尽力すべきか、スタートの姿勢を内部検討した。先ず、その根底にボランティア精神を据えて参画すること、また、日常活動で蓄積してきた成果を市史に提供することとし、市史のためにする特別調査は必要最小限に留めた。このような姿勢と方向とを打ち出すことを可能にした力は、自然調査活動を永年にわたって実行している主体的集団「自然観察グループ」の存在であった。幸いなことに、このグループには各生物分野の専門的研究者が名を連らね、中核的メンバーとして活動している。単なる自然愛好者の集団として留まることなく、科学的能力と調査意欲とを兼ね備えた実力集団である。調査活動に当っては、生活地域の自然を科学的に把握することを目標に挙げ、自然を愛する市民層を拡大することを目指して努力している。

福生の自然を組織的に観察する契機となったのは、一九七五年二月二十七日に行われた野鳥観察会（教育委員会主催）であった。それは直ちに青年グループに受け継がれ、やがて、自然観察グループへと発展していった。一九七八年七月には「自然観察通信」の一号を創刊し、今日に至っている。この地元中心主義の自然観察グループは、僥倖とは言え、市民の中に育ったプロとセミプロの集団であり、市民だけで構成されているのはユニークである。

今回、自然環境分野でいささかの貢献ができたとすれば、市史編さんを機にして野鳥と昆虫に関する活動成果を公に

することができたことである。移動する生物の地域における生物相をとらえるには様々な困難がつき纏う。季節により、時刻により、また、各年度によって生物相が変り易い。それを克服できたのも、このグループの活動に依拠している。いずれにせよ、永年の成果を累積データ化できた意義は大きいと言わねばならない。執筆者とグループ諸氏に感謝したい。

最後に一言、この研究誌のネーミングについて触れておきたい。「みずくらいど」は、福生の独自性を美事に表出しており、福生にふさわしく親しみ易い。新井委員のアイディアによったこの名は、委員全員の共感をもって迎えられた。また、この表紙を飾っている題字は、ある方に筆書していただいた数葉から選んだものである。「みずくらいど」を一字一字に分け、数葉すべての文字の中から各文字を選定し、ジグソーパズルよろしく再構成して完成させた。これが表紙文字の決定の経過である。

この記事の全体テーマ「福生市史の編さんを終って」に接して、脳裏を真先にかすめたのは、調査の補助、原稿の督促、編集作業、業者との応接など複雑多岐な仕事に多忙であった編さん室諸氏の姿であった。いつまでも印象に残るにちがいない。

（みやおか・かずお　市史自然環境担当　専門委員）